

幼児の声域について

武岡真知子
(富山女子短期大学)

はじめに

歌う活動は幼児にとって一日の生活の中で実に大きなWeightを占めており、幼児期における成長と発達に大きく関わりを持っている。その歌う能力も、当然心身の発達からきりはなして考えることはできない。歌唱の場合の声域の発達も子どもの身体の成長と共に発達していくが、環境やいろいろな条件によって一様でなく、その上個人差が非常にある。幼児の歌唱指導においてもそれを無視しては良い指導はできない。そこで幼稚園児の声域を調査することによって、幼児の歌唱指導上の留意点を考察してみたい。

方法

1 対象

富山県内の幼稚園児300名(年少77名、年中85名、年長138名)を対象とする。

2 調査の時期

昭和57年9月~11月

3 声域調査の方法

音階を歌う・園で歌っている歌を歌う。こ
とばあれびで問答的に歌い、音の高さを移調し
て歌う

結果及び考察

調査結果による年齢(年少・年中・年長)・男女別声域表・グラフ

声域の比較

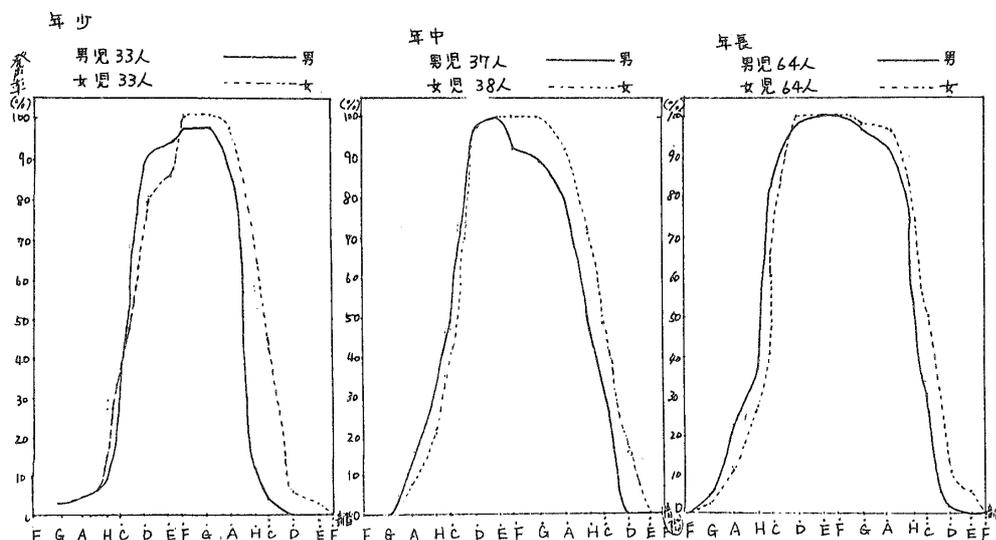


表1 声域幅の平均値の比較

年齢別	性別	男	女	平均
年少(3-4歳)		4.0	4.9	4.5 → 約長6度
年中(4-5歳)		4.6	5.2	4.9 → 約短7度
年長(5-6歳)		5.4	5.4	5.4 → 約長7度

表1は、半音(値0.5とする)、全音(値1とする)の数を調べ、声域の広さの平均値を求めたものである。表1を見ると声域の幅は、年齢がすすむにつれて次第に広がっていくことが明らかである。その差は1年間に平均約0.5(半音)広がっていている。また、年少においては男児より女児の方が1度近く広い。しかし、年中の差は0.6と縮まり、年長児においては男女共同の数値になっている。音程にあってはめると年少約長6度、年中約短7度、年長約長7度の音域になる。

表2 中央八音(c)と二点八音の音域調査



年齢別	Cの高さが出る		cの高さが出る	
	男	女	男	女
年少(3-4歳)	48%	45%	3%	42%
年中(4-5歳)	49%	47%	32%	50%
年長(5-6歳)	83%	59%	29%	50%

表2によると年少男児は、二点八音はわずか3%しか出ない。ほとんどの年少男児は二点八音は出ないと言えぬ。年長児においても女児の半数は二点八音が出るにもかかわらず、男児では29%となっている。女児は年少から年長まで半数近くの者が二点八音の高さを出せるのである。その反面、中央八音は女児より男児の方

が全体的に数値が高い。特に年長男児では、8割以上の者が出ることが出来る。全般的に女児は男児より高い声で、逆に男児は女児より低い声が出ると言えよう。この表2でも声域が広がっていることがわかる。但し、年長の男児は、特に低い声だけが大きく延びている。男児は女児より声域変化が激しい故に、歌唱指導において留意すべき点が多い。

高音域と低音域の幼児について

成人の声は声種によって、女性ではソプラノ、メゾソプラノ、アルト、男性ではテノール、バリトン、バスという区別がある。これは声帯の長さに関係して来るが、もちろん幼児においても同じことが言える。調査の中でも高音域では①F₄~F₅、②A₄~E₅の音域の幼児もいた。また低音域では③G₃~E₃の幼児もかなりいた。



このような幼児には常にその高さに合った伴奏で歌うことができるというのだが、保育における一斉指導においてはなかなか難しい問題である。

広音域の幼児について

表3 各年齢による最広声域児

	声域幅	人数	率
年少男	6.0	1人(33人中)	3%
年少女	8.0	1人(33人中)	5%
年中男	7.5	1人(37人中)	3%
年中女	7.5	2人(38人中)	5%
年長男	7.5	4人(64人中)	6%
年長女	10.5	1人(64人中)	2%

生後、3~6年間でこのように声帯が発達するとは驚異である。この幼児達は、ほとんど音量が量だけで歌が上手であった。声区の切り替えも声があまり変わらないうで歌えた。全員歌が好きで、よく歌うということであった。

表4 各年齢による最狭声域児

	声域幅	人数	率
年少男	2.5	3人(33人中)	9%
年少女	2.5	2人(33人中)	6%
年中男	1.5	2人(37人中)	5%
年中女	2.5	3人(38人中)	8%
年長男	3.5	3人(64人中)	5%
年長女	3.5	6人(64人中)	9%

狭声児とは、歌声の出る範囲が狭い子どものことである。(この調査は頭声的発声のみを調べたので Fal-

settoは調べていない。) 年中男児に15(短3度)しか出ない者が2人もいた。狭声児の発声状態は、ほとんどのように口が開かず、顎や舌が硬直した状態のまま発声している。これを解決するためには、欠伸や、うがいのときの要領で顎関節をまずゆるめ、顎や舌の緊張をとりぬくことが先決問題である。

発声訓練された特別な児童の声域について。

(木下式音感教育による)

表5

	男	女	平均
年少	7.0	6.4	6.7
年中	6.6	8.5	7.6
年長	7.3	9.0	8.2

(但し、この調査は人数が少ないので(31名年令的)比較はできない。)

指導者の模範唱による、毎日の積み重ねる発声練習によって声域を広げることができるといえる。調査した人数は少ないが、全園児が表5のように広い音域で声が出る。(特に高い声が出た)

その発声は地声で歌っている幼児もいたが、ほとんどの幼児は頭声的発声で、音量のある登みきった声を出していた。

まとめ

現在、幼児についての音楽能力の測定、調査は少ない。それゆえ理想的な幼児の音楽指導は、現在でも暗中摸索の状態であり、それに携わる者の課せられる大きな課題である。幼児の音楽的能力の実態や発達を知ることは、指導者にとって非常に大切なことである。歌唱指導においても、本当に子ども達は歌い易く歌えているか。その年齢に合った音域の曲を選択し、歌い易い高さで伴奏を弾いているか等の細心の注意が必要であり、歌う高さを替えれば、声がかちんと出る幼児もいるということも知っておかねばならない。気持ちよく歌うことは、歌を愛する心情を培うことにつながる。また「声域」それ自体も遺伝的要因は大きい。取りまく環境、練習によっても違いが出てくるということも知っておくべきであろう。また子どもは、ものまねの天才である。とりわけ、常に接している人の影響を強く受ける。話し言葉においても、きれいに話す母親(保育者)とそうでない母親(保育者)では子どもへの影響は大きく違って来る。発声も同様である。